

興聖寺開山山円和尚撰『諮詢仏法録』について

——十条の質問と松雲大師の詩文——

古瀬珠水

An Inquiry into Buddhist Teaching 諮詢仏法録 by Enni 円耳 : His Ten Questions and
Poems by Master Shoun 松雲大師

Tamami Furuse

A document titled *An Inquiry into Buddhist Teaching* (*IBT*) stored in Koshoji 興聖寺 in Kyoto has recently been made available to the public for the first time. It was already known that Enni, the founder of Koshoji, had compiled some questions about Zen Buddhism and showed *IBT* to a Korean monk, Master Shoun who had come to Japan in order to negotiate the return of Korean hostages captured during the wars between Japan and Korea in the late 17th century.

IBT is composed of 10 questions about the basic thought of Linji 臨濟 Zen school, each of which includes the words “I ask for your judgement” while discussing the content of Zen philosophy. In the 10th question, Enni revealed that he finally acquired true understanding by the phrase “parting from thinking and things” in *Qixinlun* 起信論 ; he also states the 6th Zen patriarch appeared to him during his meditation.

Enni submitted *IBT* to Master Shoun while the latter was staying at Honpoji 本法寺 in Kyoto. According to some records, Master Shoun was very surprised to read it because Enni had captured well the essence of Zen teaching. Master Shoun in return gave Enni his poems. Master Shoun’s *Collected Poems by Master Shimei* (*CPMS*) 四溟堂大師集 , contains six poems, organized into two groups of three under separate sub-headings. The three poems in the first group under the sub-heading ‘Three Japanese monks visited from Five-Mountain-Zen temples. I gave poems as asked about Buddhist teaching’ were probably written during his stay in Kyoto, because ‘asked about Buddhist teaching’ refers to *IBT*. Those three poems expound what self-awakening is and how it can be reached. The three poems in the second group subtitled ‘Poems for Japanese teacher Enni’ were given to Enni either directly or possibly by his disciple a year after Master Shoun left Japan. From these poems we get a clear understanding of Master Shoun’s personality; humbleness, generosity and friendliness as a monk.

IBT is valuable not only as it reveals how much Enni, who converted from the Nichiren school to Zen, was influenced by Zen, but also because it performed the important role of improving the image of Japanese monks among Master Shoun and his compatriots who had previously held negative feelings towards the Japanese as the result of the recent wars.

興聖寺開山円耳和尚撰『諮詢仏法録』について

——十条の質問と松雲大師の詩文——

古瀬珠水

はじめに

筆者は平成二十八年十一月十二日に国際仏教学大学院大学公開研究会において、「新資料興聖寺開山円耳和尚撰『諮詢仏法録』について」の題目で『諮詢仏法録』について発表した。また、同時期に『諮詢仏法録』の翻刻（註を含む）・訓読及び解題は、私家版『興聖寺開山四百回忌記念』^①に掲載させて頂いた。

本論では上記の発表内容及び解題を基に、更に詳しく『諮詢仏法録』の内容、及び『諮詢仏法録』を廻る朝鮮僧侶惟政（または松雲大師）^②との関わりについて論じる。（尚、本論では、漢字及び仮名は通行字体、新仮名を用いる。また『諮詢仏法録』、『興聖開山虚応和尚行状』（『行状』）は訓読文を掲載する。）

一 『諮詢仏法録』について

『諮詢仏法録』は京都市堀川興聖寺に蔵された興聖寺開山和尚円耳撰の資

料である。筆者は平成二十六年一月、落合俊典先生のご指導の下、興聖寺で当資料を閲覧する機会に恵まれ、さらに当時の住持長門玄晃和尚とお話をさせて頂く幸運を得た。その後、国際仏教学大学院大学古写経研究所による影印資料を手元に置き研究を始めた次第である。

1 書誌情報^③

体裁は、楮紙、卷子一卷、一紙、一行、一五行一七字、縦三一・五センチ、横四六・七センチである。外題は『諮詢仏法録』、内題はなく、表紙もない。奥書には「日本慶長第十龍集（己巳）曆二月朔日沙門圓耳了然稽首和南」とあり、慶長一〇年（一六〇五）二月一日に、興聖寺開山円耳和尚によって書かれたことがわかる。

題目『諮詢仏法録』は、円耳に関わる他の資料のなかでは、『仏法綱要十則』^④（『続日本高僧伝』「円耳伝」）、『諸録之綱要』^⑤（『慈眼大師伝記』）、『禪宗綱領』^⑥（『四溟大師集』）、『仏法綱要十條』^⑦（『行状』）など、さまざまな題名で表されていたが、当資料により明確になった。

2 内容の要約^⑧

内容の形式は一〇項目の質問から構成され、それぞれ先ず各質問内容を端

的に述べ、「請判是非」（是非を判ずるを請う）と、回答を求めることばを付している。その後、問答形式で質問の詳しい内容を示し、内容の是非や円耳の理解の是非を問う形になっている。各質問とその内容の要略は以下の如くである（『諮詢仏法録』の翻刻文は本論の後に附する）。

① 見性は悟道か？

問、何が仏？

答、即心是仏。心が仏。心が無念ならば一切衆生は本有円成仏である。

② 教外別伝とは？

問、教外別伝とは何か？

答、二義あり。（一）達磨大師の受法は以心伝心、不立文字。実際には、執を破せんとしてこの言葉がある。文字を離れて解脱を説くわけではない。『金剛経』と『楞伽経』などが良い例である。（宗密『禪源諸詮集都序』より引用）（二）本来の姿には文字無いが、諸宗は文字を以て引道する。

③ 不用文字と言ひ、しかも言句を用いるのか？

問、不立文字、直指人心といひながら、『達磨三論』、『信心銘』、『六祖壇経』、禪の語録が天下に満ちあふれている。何が教外別伝か？

答、今、禪の言句は繁多だが、仏法は言句の上に示さない。すべては教釈、仮の言句である。

問、それならば、諸録中、諸の大乗経を引き、祖意を述べるのは何故か？

答、真理を理解している人ならば、大乗経論のことばと達磨の禪とは

ぴったりとは合うことが解る。

④ 禅門の本分は生仏未分位について

問、「生仏未分位」は教門と同じではないか？

答、禅はすぐに「生仏未分位」の境地に入る。教門は段階的に本分に入ると言う。

⑤ 禅門は修行用心を立てないのか？

問、直下に悟解したとしても凡執を断じ難い。どのように本分に入るのか？

答、禅門の本分はすでに備わっており、善知識は機縁を見て直下に大悟し、「即心即仏」、「庭前の柏樹子」などを示す。教家のような修行用心とは同じではない。

問、直下に大悟しても凡執は断じがたい。どのように修行せずして本分と一体化できるのか。

答、修行を借りずに本分に入る人は、このようなことを論じない。方便中に方便を、修証中に修証を立てない。

⑥ 法界平等は「無解」、「無証」のなかに、仮に「解悟」、「証悟」を立てるかどうか？

問、本分を「解了」するのは易しいが、本分を「証」するのは難しい。本分に到れば、相は断絶し、妄想の熾然を顛倒するという。しかし、仏法の正伝とは、大慈悲をもって衆生を施利することである。どう、理解すべきか。また、『禪源集』の中に「漸修頓悟、頓修漸悟、漸修漸悟、頓修頓悟」とある。臨濟宗は「無修証」の中「修証」を認めるのか？

問、日本の昔の高僧らは、慧能禪師は「頓悟漸修」、五祖以下は「本来無一物」と「頓悟」し、その後、剃髪、受戒して仏法を学ぶことを「漸修」と言う。これは正しいのか？ また、慧能禪師の「頓悟漸修」に属す人は、本分とは分際を理解することというが、果たして法を得ているのか？ 私は疑問に思っている。慧能禪師の「頓悟漸修」に属す人はいったい誰が「頓悟頓修」だと思っているのか？

⑦ 宗密禪師の分類（教には三宗を立て、禪には三宗を立て、配對して相符す）を臨濟宗は認めるのか？

問、宗密禪師の三教と三宗の禪を組み合わせれば、円見を得るといいますが、臨濟宗は認めるか？

答、教は文字を以て顕し、禪門は不立文字、直に本分を示す。両者は同じでないが、理のうえでは同じではないだろうか。

⑧ 法眼宗・荷沢宗は心を以て名とし、知を以て本体とする。臨濟宗はこれを認めるか？

問、『宗鏡録』や『禪源集』には、言句をもちいずして「知の義」、「黙して心印を伝う」と言う。臨濟宗はこれを認めるか？

⑨ 本分契當は、ただ一仏を共に作すのか？

問、『宗鏡録』には国清寺（天台宗）が法界であり、住寺の僧侶が「一仏」と言う。（延寿の考えは）禪と教の意は共に同じである。臨濟宗はこれに対しどのように反論するのか？

⑩ 坐禅中、慧能禪師が光来し悟道を印可することがあるか？

私は慶長四年九月一日、坐禅中に慧能禪師が現れ「汝の一心は私に伝わった。汝は道を悟ったので印可する」と言われた。また、「馬鳴菩薩

に依れば心体が念・相・語を離れた者は道を悟ると言う。汝は本当に禪師か」との問いに、私は「本来無念相、本来円成仏」と答えると、「汝は法を伝え、相続すべし。仏の種を断絶することなかれ」と言われた。

問、私の体験から、このように坐禅中に印可されることがあるのか？ また、この禪の道に出会い、ますます信じるべきか？

私は『起信論』を閲覽し十九歳で出家した。天台宗を十年勤勉し、あらゆる経論を誦読した。その後、学徒に天台教学を十二年講じた。しかし、教綱を脱することができず、仏の法を得られなかった。あるとき『起信論』の「離念相」の句に了解した。それから禪語録五十部を読み『起信論』の解を験得する。坐禅工夫をして靈瑞をみることにできた。今、私は幸いにも万里を渡らずして大師にお会いすることができた。このような徳をどう思えばよいのか？

以上一〇項目から、『諮詢仏法録』の内容は基本的に臨濟禪についての質問であることが判明した。『大乘起信論』、『六祖壇經』、『禪源諸詮集都序』、『宗鏡録』などの伝統的な禪書を引用して、円耳の禪宗理解が間違っていないかを質問している。第一〇条にも述べられているように、円耳は一九歳で出家し（日蓮宗に入門し）、^⑨ 台教を勤勉し講じてきたが、教綱を脱することができずにいたところ、『起信論』の「離念相」の句に真の理解を得、以後、禪語五〇部を誦したとある。つまり、円耳には特に直接禪宗の師をもたずして、書物を読んで禪宗に転じている。そのような中で、朝鮮で名声のある松雲大師来日に合わせて自身の禪宗理解が正しいか否かを質問する。

『諮詢仏法録』の質問内容は、第一条から第六条までが、基本的な臨済禅に関する項目（「即心是仏」、「教外別伝」、「不用文字」等）に関する質問である。第七条及び第八条は、荷沢宗の宗密、法眼宗の延寿が「知」を立てることに對する臨済宗の理解を尋ねる。また、第九条では、理の上では禅宗も教学も意は同じではないかと質問する。最後第一〇条では、円耳が『起信論』における「離相念」に深く感じ入り、悟りに至ったこと、また、円耳自身が坐禅を通じて得た慧能とのやり取りが、禅宗へ傾倒していったことを吐露している。

また、夙に円耳は松雲大師に仏法質問書を示していたことは上述の如く知られていたが、第一〇条後半部分には、

予、今、幸に萬里を渡らずして、坐して径山大善知識に値う。世の因縁に宿らずして、何が此の事を預かる。大慈悲を垂れ、大法をして伝授をせしむ。其の徳は何が思量すべきや。

とあり、「坐して径山大善知識に値う」と叙している。「径山」とは『慈眼大師伝記』に「高麗僧径山惟政大師」¹⁰とあるほか、興聖寺藏「松雲大師肉筆墨跡」¹¹五点のうち一点の最後には「経山後孫四溟松雲頓」とあり、松雲大師は自身を「径山」と称している。径山は中国五山の一つで、禅門の大道場興聖万寿禅寺があり、臨済宗の高僧円悟、大慧、無准などが禅の修行をした臨済宗の本山である。つまり、松雲大師は自らを「径山」と云うことで、臨済宗の流れをくむ弟子と自負していることが分かる。「径山大善知識に値う」とは、確かに円耳が松雲大師に会い、質問書である『諮詢仏法録』を呈示した

ことを明記していることとなる。

3 『諮詢仏法録』と松雲大師

前述のように『諮詢仏法録』は正に円耳が松雲大師へ宛てて書いた禅門に関する質問書であることが明らかになった。今、最後の奥書の年月日を見ると、「日本慶長第十龍集乙巳曆二月朔日沙門圓耳了然稽首和南」となっている。「慶長第十龍集（乙巳）曆二月朔日」とは「慶長十年二月一日」であるが、恐らくこの日に円耳が『諮詢仏法録』を書き終えたと考えられる。その後、円耳が松雲大師に面会（『諮詢仏法録』を提示）した日には不詳であるが、松雲大師は慶長九年十二月二十七日に京都に到着、本法寺に投宿し、三ヶ月後の三月二十七日に京都を離れているので、この間に円耳が対面していることは確かであろう。

松雲大師が『諮詢仏法録』を高く評価している点は、『行状』に「雲、書を接して嗟嘆して曰（く）。日域に明眼の人有るかな。」¹³、『続日本高僧伝』「円耳伝」に「雲接書。嗟嘆曰。日域有明眼人哉。」¹⁴、『慈眼大師伝記』に「問答往復文筆走玉、政大師大器許焉。」¹⁵と示されている。さらに、松雲大師が円耳に印可を与えたことは、『行状』に「答書に其の所証を印し、大いに虚応の二字を書して、師に与えて字と為せり。」¹⁶、また『続日本高僧伝』「円耳伝」には「答書印其所証。大書虚応二字附之。」¹⁷とあり、松雲大師は円耳の『諮詢仏法録』に対し、答書として円耳に「虚応」の二字を与えたわけである。

4 教禅一致と松雲大師

円耳は『諮詢仏法録』の第九条には『宗鏡録』から引用した一文を掲載した後、「禅と教の意は共に同じなり」と言い、「臨済宗に於いて如何が之を辨

ずや」と質問している。円耳は教外別伝による禅の体得の必要性和同時に、諸教に示す仏教理論の正当性も認めている。元々優秀な学僧として天台教学の講師を勤めていた円耳が禅門に興味を持ち、禅籍を研究し禅宗に傾倒していったわけだが、『宗鏡録』に当たり「禅も教も詰まるところに違いが無い」と述べる延寿の考えに影響受けたと考えられるだろうか。実は松雲大師も禅僧でありながら、師の西山大師休静のいう「捨教入禅」とは異なり「教派」にあつたと言う¹⁸。果たして、円耳がどこまで松雲大師の考え方を知って『諮詢仏法録』を書いたかは判らないが、円耳は『諮詢仏法録』を書いた後、天台宗天台和尚（慈眼大師）と交流を持ち、教禅一致を説く長楽寺葉上派の門下に配されることとなるから、両者の間には禅と共に教学の重要性も共通の認識として有していたと推察できようか。

二 松雲大師の詩文

円耳が『諮詢仏法録』を松雲大師に提示したことに対して、松雲大師が円耳に詩文を一篇贈っていたことは、『行状』で示されている。

十年孟春、径山の三十七世松雲大師、朝鮮より来る。旨有（り）て、都下の本法寺に館す。師、思惟すらく、従上の諸師、法の為に山川を踏み、滄波を渉る。我れ今幸（い）に万里を踰えずして、坐（しなが）ら異朝の宗師を迎う。宿に良因を植るに非んば、争か萍水相逢うを得んや。便ち仏法の綱要十条を述（べ）て、南禅の仙菓長老を价して、雲に諮詢す。雲、書を接して嗟嘆して曰（く）。日域に明眼の人有るかな。乃ち答書

に其の所証を印し、大（い）に虚応の二字を書して、師に与えて字と為（せり）。其の説に曰（く）、日本国円耳禅師、南禅の長老巢公に因り（て）、道号を余に徴む。虚応を以て字と為（せり）。無染を以て号と為（す）。観音大士返聞自在の意を用（つ）てなり。唯、師、意を顧（み）て心に存せよ。仍て古に擬して、近体一篇を作り（て）、以て法眼を汚す。幸に一笑せよや。「言前の活路遅留すること莫れ。直道行行到（り）て始（め）て休す。物を鑑（る）こと冲虚にして所住無く、機を回ること寂照にして由る攸有り。頂門に眼を具う天主の如く、肘後に符を懸ること国候に似たり。世を度し生を濟（い）て幻海に遊ぶ。船の無底に駕して波頭に任す」と²⁰。

また、ほぼ同文が『続日本高僧伝』「円耳伝」にも掲載されている。

十年正月。松雲大師從朝鮮来。有旨館京都本法寺。耳便述仏法綱要十則。呈于雲大師。雲接書。嗟嘆曰。日域有明眼人哉。乃答書印其所証。大書虚応二字附之。其説云。日本国円耳禅師。因南禅師老巢公。徴道号於余。以虚応為字。以無染為号。用観音大士返聞自在意也。唯師顧意而存心焉。仍擬古作近体一篇。以汗法眼。幸一笑哉。言前活路莫遲留。直道行々到始休。鑑物冲虚無所住。回機寂照有攸由。頂門具眼如天主。肘後懸符似国候。度世濟生遊幻海。駕船無底任波濤²¹。

筆者は上記の詩文一篇が、興聖寺に「松雲大師遺墨」として現存すること

を、李元植氏の論文「講和使僧松雲大師と日朝善隣外交」²²で知った。李元植氏は「松雲大師遺墨」の写真を載せ、その翻刻をされているが、一部誤りもあるようなので、筆者は改めて以下翻刻してみた（但し漢字は通行文体に改めた）。

日本国権大僧都円耳禅師

乃本国教師也因南禅長老巢

公微道号於余以虚応為字以無

染為号用観音大士返聞自

在意也唯師顧意而存心焉仍

擬古作近体一篇以汚

法眼幸一笑哉

言前活路莫遲留 直道行々到始休

鑑物冲虚無所住 回機寂照有攸由

頂門具眼如天主 肘後懸符似国候

度世濟生遊幻海 駕船無底任波頭

經山後孫四溟松雲頓

恐らく、『行状』はこの興聖寺に蔵してあった「松雲大師遺墨」を写し、更に『続日本高僧伝』の作者道契（一八七六年著）に伝わったと考えるべきであろう。

ところで、『四溟堂大師集』²⁴（『韓国佛教全書』巻八に所収）には、松雲大師が円耳に贈ったと思われる詩文が二件都合六首掲載されている。一つは見出

しに「五山三倭僧来見 因問禅宗綱領以無頭話贈」であり、七言絶句の詩文が三首書かれている。「五山三倭僧」とは、恐らく秀吉・家康の外交僧であった相国寺の臨濟僧西笑承兌が一人目に当たるとであろう。『鹿苑日録』『慶長十年正月から三月』には、承兌が松雲大師が滞在している本法寺を何度か訪れている記録がある。二人目は、『行状』に「日本国円耳禅師、南禅の長老巢公に因りて、道号を余に徴む。虚応を以て字と為せり。無染を以て号と為す」²⁵、また『続日本高僧伝』『円耳伝』に「日本国円耳禅師。因南禅師長老巢公。微道号於余。以虚応為字。以無染為号」²⁶とあり、朝鮮との交渉役をしていた臨濟僧景徹玄蘇が当たるとであろう。そして三人目が「禅宗綱領」つまり『諮詢仏法録』を提出した円耳と推察されるのである。「三倭僧来見」と記しているので、三首の七言絶句をそれぞれの僧侶に一首ずつ贈ったとも考えられるが、「因問禅宗綱領」とあるので、明らかに円耳に『諮詢仏法録』に対する回答詩文と思われ、三首とも円耳に贈ったと考えた方が自然かと思われる。²⁷「以無頭話贈」とあるが「以無頭話贈」の誤りではないだろうか。「以無話頭」つまり「公案を用いずに」の意味と考えられる。二つ目の見出しは「贈日本円耳教師三」とあり、明らかに円耳に贈った詩文である。七言律詩の詩文が一首、七言絶句の詩文が二首書かれている。上記「松雲大師遺墨」と同様の詩文は「贈日本円耳教師三」の第一番目の七言律詩の一首に当たる。しかし、数カ所の語句が上記のものとは異なる。以下、『四溟堂大師集』に掲載されている詩文を示す（□で囲った語句が上記「松雲大師遺墨」とは異なる）。

歸家活路莫遲留 直透威音那畔休

鑑物冲虚無所在 回機寂照有_采由

頂門具眼如天主 肘後懸符_以国候

_{浮世}度生遊幻海 駕船無底任波頭₂₈

「松雲大師遺墨」は松雲大師自筆のものであるから、こちらがオリジナルであることは疑問を挟む余地はない。一方、『四溟堂大師集』は一六二二年、松雲大師の弟子恵球が書き取って編集・刊行したものであるから、誤謬または修正が施されたと考えるのが妥当であろう。²⁹

今、松雲大師から円耳に贈られた「贈日本円耳教師三」の第一番目の七言律詩を読み取ってみよう。³⁰ 先ずは、「松雲大師遺墨」に書かれた詩文を示し、訓読文・現代語訳を付す。

第一首

言前活路莫遲留 直道行々到始休

鑑物冲虚無所住 回機寂照有_采由

頂門具眼如天主 肘後懸符似国候

度世濟生遊幻海 駕船無底任波頭

言前の活路、遅留すること莫れ。直道行く行く到て始めて休せば、物を鑑ること冲虚にして所住無く、機を回らすこと寂照にして由_采有り。頂門に眼を具すること天主の如く、肘後に符を懸ること国候に似たり。世を度し生を済いて幻海に遊び、駕船に底無くして波頭に任す。

ことばで言い表せない道を進むときは、ぐずぐずしてはいけない。真っ直ぐに行けば、もう大丈夫だ。ものごとは空でどこにもない。物に接しても住する所は無い。機がめぐって寂照が当たれば、その理由が分かる。そうなれば、天主のように頭のとつぺんに眼を持ち、国王のように立派な装飾品を身につけるといふものだ。この世を生きることは幻海に漂うようなものだ。底の抜けた船に乗り、波に身に任せようか。（行くべき道を通り直ぐ進みなさい。全てのもが空だと解つたら、もう自由自在だ。この世を泰然と生きてゆこう。）

次に『四溟堂大師集』に掲載された詩文「贈日本円耳教師三」の第一首を示す。

_{歸家}活路莫遲留 直透威音那畔休

鑑物冲虚無所在 回機寂照有_采由

頂門具眼如天主 肘後懸符_以国候

_{浮世}度生遊幻海 駕船無底任波頭

歸家の活路、遅留すること莫れ。直に威音那畔を透り休せば、物を鑑ること冲虚にして所在無く、機を回らすこと寂照して由来有り。頂門に眼を具すること天主の如し、肘後に符を懸ること国候以え。世に浮かび生を度して幻海に遊び、駕船に底無くして波頭に任す。家（本来のあるべき所）に帰るにはぐずぐずしてはいけない。真っ直ぐに

父母も未だ生まれなかつたときの、あなたの本当のすがたに戻ればもう大丈夫。物に接しても、空であるから住する所は無い。機がめぐって寂照が当たれば、その理由が分かる。そうならば、天主のように頭でつぺんに眼を持ち、国王のように立派な装飾品を身につけるといふものだ。この世を生きたことは幻海に漂うようなものだ。底の抜けた船に乗り、波に身に任せようか。(行くべき道を真っ直ぐ進みなさい。全てのものが空だと解つたら、もう自由自在だ。この世を泰然と生きてゆこう。)

上記の一首は、『行状』の註(1)にも示されているように、『宏智禪師広禄^①』に納められている詩文を模したものである。禅僧として精進して本来行くべき所へ到達すれば、自身が自由自在になれることを説く。

『四溟堂大師集』所収の「贈日本円耳教師三」の内、残りの二首は興聖寺藏「松雲大師遺墨」にも『行状』にも『続日本高僧伝』『円耳伝』にも掲載されていない。松雲大師が最初的一篇に加えて、京都に滞在中に円耳に贈つたものなのか、あるいは後述するように、帰国してから円耳を想つて創作したものは不明であるが、その詩文の内容を味わってみたい。

第二首

参禅須破祖师関 縛虎拏龍莫等閑

直得驚天動地去 此時方得至家山^②

参禅は須く祖師の関を破すべし。虎を縛り龍を拏えんに、等閑なること

莫れ。

直に驚天動地し得去すれば、此時、方に家山に至るを得べし。

参禅とは祖師の設けた関門を突破しなければならぬ。それは、虎を縛り、龍を捉えるのにボヤツとしてはならない。直接、天を驚かし地を動かしてみなさい。この時こそ、家(本来あるべき所)へ帰ることが出来る。(祖師から与えられた課題を次々と破っていきなさい。そんな中であなたの心がガラッと変わったとき、本来あるべき所に到達する。)

第三首

客路逢新歳 寒梅海国春

朝来攬明鏡 白髮是何人^③

客路、新歳に逢う。寒梅、海国の春。

朝来、明鏡を攬る。白髮は何人。

私は旅をしている時に新年になった。寒梅が咲いた海(日本)は春。朝が来て、私は鏡を取って自分を見ると老人がいるではないか。一体これは何者なのか。(日本へ行って、あなたのような悟りの境地に到った人に会えて大変嬉しい。あなたと私は同じ境地にいながら別々である。)

第二首は禅僧として仏の教えを自分自身で獲得する手法を示す。「参禅須く祖師の関を破る」とは、祖師から与えられる課題を突破することで、自身

の心が大変革を起こし、ついに本来あるべき所へ到ることを説く。恐らく、公案禪を念頭に置いた臨濟禪の手法である。また、円耳が『諮詢仏法録』第一〇条で「禪祿五〇余部を集め之を誦し」と述べていることから、祖師伝などに囚われることに注意しているかもしれない。禪宗の修行、つまり他人の書いたことばなどに左右されず、自分自身で掴み取って、本来あるべき所へ到達して欲しいと願ったのかもしれない。

第三首は、実心が温まる一首である。松雲大師は秀吉によって二度も母国を戦禍に見舞われ、日本や日本人に対し強い憎しみを抱いていても不思議ではないはずである。松雲大師はその戦後処理の為に敵国である日本へやって来ているわけだが、詩文から読める松雲大師の日本人に対する態度や心根は極めて温かく深いものである。松雲大師は円耳以外にも承兌、玄巢、元信等々、多数の詩文を贈っているが、敵国人として恨み辛みなどを吐くのではなく、人として敬意を払って接していることが頷ける。何宇鳳氏は「同じ臨濟宗派の僧侶と会い、虚心坦懐な交流があつたようである」³⁴、「彼らは同じ仏者としてのみならず、人間的交流を通して、お互いに深い信頼を分かち合う関係となつたようである」³⁵と述べている。更に、松雲大師は自身と円耳が同じさとの境地を知ると同時に、やはり別々の個人であること³⁶を最後の一句「白髪是れ何人」で示唆しているようである。

さて、『四溟堂大師集』には「贈日本円耳教師三」の他に「五山三倭僧来見 因問禪宗綱領以無頭話贈」に七言絶句の詩文三首が所収されている。上述したように「禪宗綱領」とは、円耳が提示した『諮詢仏法録』を指していると考えられる。『諮詢仏法録』の中で十の項目を立て「請判是非」（是非を

判ずるを請う）とあるので、こちらはそれらに対する松雲大師の返答を詩文にしたと考えてよいであろう。³⁷ その三首を見てみよう（原文、訓読文、現代語訳の順で示す）。

第一首

人人脚下活獅子 誰怕南山鼈鼻蛇³⁸
一口倘能吞海尽 珊瑚带月出滄波³⁹

人人の脚下に、活獅子あり。誰か南山の鼈鼻蛇を怕れん。

一口に倘し能く海を呑飲み尽くさば、珊瑚は月を帯びて滄波から出でん。

一人一人の脚の下に活き活きとしたライオン（自己）がいる。誰が南山の毒蛇（雪峰禪＝峻烈の禪）を怕れるか。もし一口で海の水を飲み尽くすことができれば、珊瑚は月を伴って波から出てこよう。（他人の作り出した概念などに心を囚われず、己自身が全力でつかみ取ろうとすれば、本来の自己が現れる。）

第二首

張奉活把惡鉗鎚⁴⁰ 打破野狐精靈窟⁴¹
因地驚天動地来 肉団即是黄金骨⁴²

張奉、惡鉗鎚を活把し、野狐精の靈窟を打破す。
因^{かつと}地、驚天動地し来れば、肉団即ち是れ黄金骨。

禪の師匠がひどい課題を持ち出したら、禪の靈窟を壊しなさい。心がガラツとひっくり返れば、自分自身が黄金の骨となる。(師匠から与えられた難題に細々悩まず、今までの常識をひっくり返し、己で切り開きなさい。そうすればあなた自身が仏となれるでしょう。)

第三首

此事從來不思議 固知無臭又無声

吾今省得巖頭喝 驢糞逢君換眼睛⁴³

此の事、從來不思議、固より知る無臭又無声と。

吾、今、省得す、巖頭の喝を。驢糞、君に逢うて眼睛を換ゆ。

此の事(さとり)はもともと不思議である。固より臭も無く、声もない無いことを知っている。私は今、はっと気がつき、巖頭の喝の意味を得たような気分だ。私はあなたに会って、目玉を取り替えることが出来た。

(禪の自分を知っていたはずなのに、すっかり忘れかけていた。しかし、今あなたに会って喝を入れて頂き、眼が醒めたようだ。)

これら三首は厳しさと大胆な喩えを以て禪の道を示している。松雲大師は円耳に参禅によって自身をガラツと変えることを説いているように感じられる。ところで、上記、松雲大師が円耳に与えた「字」の「虚応」は、松雲大師の師・西山大師の師に当たる虚応堂普雨大師から選り取ったと考えられよ

う。恐らく松雲大師が円耳の『諮詢仏法録』を読んで、円耳が臨済宗を深く理解していることから、同臨済宗の法脈に繋げる目的があったと推察できよう。松雲大師は自身を「径山三十七世」と云い、承兌に贈った詩文の中では「係出同宗血脉通⁴⁴」と、同じ臨済宗の血脉があることを大事に考えていたと云えるであろう。⁴⁵

ところで、『行状』には「歳を彌て、雲の徒、妙見禪師と云(う)人有(り)て来朝す。一日師を訪て曰(く)。吾が翁、帰後、話、日東の事に及ぶ毎に、未だ曾て公を称せずと云(う)こと)有ること無し。故に来(たり)て謁を取るのみと。尋師に伽陀一篇を贈る⁴⁶」とある。この『行状』の松雲大師の弟子の「妙見禪師」についての内容は今まで知られていなかったことであるが、もし、真実だとすれば、松雲大師は帰国してからも円耳を思い出し、詩文を創作し、弟子を遣わせてわざわざ日本へ贈り届けさせるなど、俗に考えれば極めて義理人情に厚い人柄といえる。但し、松雲大師は仏教僧侶としての行為とみるべきで、「字」および「号」を授けた円耳と師弟関係を結んだ間柄を重んじており、仏法に深く帰依しているとみるべきであろう。妙見禪師については、今後の研究成果を期待したい。

さて、松雲大師の弟子妙見禪師が松雲大師帰国後、再び円耳を訪れて「伽陀一篇」、つまり詩文一篇を贈ったとあり、『四溟堂大師集』に収められている円耳へ与えた詩文(贈日本円耳教師三)の三首と「五山三倭僧来見 因問禪宗綱領以無頭話贈」の三首)全六首のうち、いずれかの一首か、または複数なのかは不詳である。上述した如く、筆者は「五山三倭僧来見 因問禪宗綱領以無頭話贈」の三首は、恐らく松雲大師が京都に逗留中に円耳の『諮詢仏法録』に対しての回答として創作した詩文ではないかと考える。一方、「贈日

本円耳教師三」の三首または一首が上記「妙見禪師」を通じて松雲大師から新たに贈られた詩文ではないだろうかと考える。内容からみても、特に第三首は松雲大師が日本滞在を懐かしむような詩文である。いずれにせよ、松雲大師と円耳の間で詩文を通じて禅門のやり取りを行い、お互いの親交を深めたことは確かであろう。

結び——『諮詢仏法録』の資料的意義——

この度、興聖寺蔵の新資料『諮詢仏法録』を翻刻・注釈・訓読する機会に恵まれたことは、江戸初期の禅宗資料を明らかにするのみに留まらず、『諮詢仏法録』の歴史的・外交上の意義を少しく呈示することができたと考え、明らかにした点を以下に述べよう。

第一に円耳が松雲大師に提出した「禅宗綱要」の題目が『諮詢仏法録』であることが明らかになった。さらに、その内容は一〇条から構成され、概ね基本的な臨済禅に関する質問である。円耳はもともと日蓮宗の僧侶として、教学特に天台学を中心に学び、後輩等にも教える立場であったわけだが、『起信論』の「離念相」に及び、仏教の本質を感じて禅宗に改宗したことも明らかにした。また、坐禅中に慧能禪師から印可を受ける体験を述べており、直接禅宗の師を持たずに禅に傾倒していったことも明らかにしている。円耳の『諮詢仏法録』に対して、松雲大師がその回答として詩文を贈っていたことは知られていたが、本論で筆者は『四溟堂大師集』に所収されている詩文の内、「五山三倭僧来見 因問禅宗綱領以無頭話贈」の三首及び「贈日本円耳教師三」の三首が相当すると考え、それらの詩文の内容を読み解い

た。その結果、松雲大師の円耳に対する真摯な態度と深い思いやりを感じることができた。さらに、『行状』に松雲大師の弟子妙見禪師が翌年来日し、円耳を訪ねて松雲大師の詩文を贈っていることから、「贈日本円耳教師三」の一首、または三首が、松雲大師が帰国してから円耳を想って創作した詩文と推察した。いずれも禅を極める手法と境地を端的に詩文に表したもので、臨済宗の禅僧らしい内容であることが解った。

松雲大師は文禄・慶長の役(壬辰倭乱)の戦後処理の為に訪れた敵国において、円耳をはじめ、多くの僧侶達に詩文を贈って深い交流をしていることが理解できる。恐らく、円耳の心の中では松雲大師は臨済宗の僧侶としての大善知識であると同時に、人として器の大きな人物と受け止めたことであろう。また、円耳が後に天海和尚に見いだされる訳だが、天海和尚の耳にも円耳が松雲大師に「日本教師」と呼ばれたことが名声として届いていたことであろう。その後、円耳は天海和尚の仲介により家康に面会し、興聖寺は世良田長楽寺の葉上派門下に入ることになる。興聖寺は江戸時代の幕藩寺社体制の中に収まり、禅教の寺として二百年余り続くわけである。

『諮詢仏法録』は朝鮮僧、松雲大師に円耳という学僧の存在を伝え、また互いに臨済僧としての法脈を深める役割を果たした。さらに円耳が『諮詢仏法録』を松雲大師に提出したことがきっかけとなり、時の権力者等に円耳の名声が届き、その後の興聖寺の歴史を形作っていったと言つてよいであろう。

註

(1) 『興聖寺開山四百回忌記念』(二〇一六)には『諮詢仏法録』の他、『興聖開山虚応和尚行状』、『般若心経註解』の翻刻(註を含む)・訓読も掲載。

- (2) 惟政(一五四四—一六一〇)は俗名が任氏、堂号が四溟、雅号を松雲といい、四溟大師とも呼ばれた。
- (3) 書誌情報は既に「臨濟宗円通寺興聖寺蔵円耳了然撰『諮詢仏法録』解題」(前掲)、『興聖寺開山四百回忌記念』で述べたが、『興聖寺開山四百回忌記念』は私家版で入手困難なことを懸念し、再度ここに記す。
- (4) 「松雲大師從朝鮮」来。有旨館_三京都本法寺。耳便述_三仏法綱要十則。呈_三于雲大師。」(『大日本仏教全書』一〇四、一八一頁下)
- (5) 「高麗僧、徑山住惟政大師、偶遊_三于此方、耳和尚得_レ時而不_レ忘、謁_三政大師之旅館、呈_三露見解、括_三諸録之綱要、捧_三教個之間書、問答往復文筆走_レ玉、政大師大器_三許焉。」(『慈眼大師全集』上、二九三頁)
- (6) 「五山三倭僧来見 因問禪宗綱領以無頭話贈」(『韓国佛教全書』八、八一—七〇頁中)
- (7) 「十年孟春、徑山の三十七世松雲大師、朝鮮より来る。旨有(り)て、都下の本法寺に館す。師、思惟すらく、従上の諸師、法の為に山川を踏み、滄波を渉る。我れ今幸(い)に万里を踰えずして、坐(しなが)ら異朝の宗師を迎う。宿に良因を植るに非んば、争か萍水相逢うを得んや。便ち仏法の綱要十条を述(べ)て、南禪の仙巢長老を价して、雲に諮詢す。」(『興聖寺開山四百回忌記念』、九頁、一一頁)
- (8) 註3と同様に「解題」に掲載した内容に少し修正を加えたものを記す。
- (9) 『諮詢仏法録』には記載が無いが、『行状』には「十九にして日蓮(の)下の意東老人を礼して髪を薙る。(中略)尋で妙満寺の日重上人に就(い)て台教の玄義文句を聴く。」(『興聖寺開山四百回忌記念』三頁、五頁)とある。また、『続日本高僧伝』「円耳伝」にも「十九歳。從_三日蓮宗意東_一剃染。尋謁_三妙満寺日重_一。聽_三玄義文句_一。」(『大日本仏教全書』一〇四、一八一頁上)
- (10) 『慈眼大師全集』上、二九三頁。
- (11) 李元植「講和使僧松雲大師と日朝善隣外交」(仲尾宏・曹永祿編『朝鮮義僧将・松雲大師と徳川家康』、明石書房、二〇〇二)二五〇頁。
- (12) 何宇鳳「国交再開期における松雲大師の活動とその意義」(同上、『朝鮮義僧将・松雲大師と徳川家康』三一二頁。しかし日本の資料「鹿苑日録」には「慶長十年正月元旦」に「高麗使卒旧冬悉上洛」(『慈眼大師全集』上、二二〇頁下)とある。また『行状』には「十年孟春、徑山の三十七世松雲大師、朝鮮より来る」(九頁)とある。さらに『続日本高僧伝』「円耳伝」も「十年正月」である。
- (13) 『興聖寺開山四百回忌記念』、一一頁。
- (14) 『大日本仏教全書』一〇四、一八一頁下。
- (15) 『慈眼大師全集』上、二九三頁。
- (16) 『興聖寺開山四百回忌記念』、一一頁。
- (17) 『大日本仏教全書』一〇四、一八一頁下。
- (18) 康東均「溟堂惟政の思想的位相に関する考察」(『印度学仏教学研究』五〇—二、二〇〇八)九八六頁。松雲大師が禪教一致の思想にあつたことは、鄭柄朝「松雲大師惟政の思想と仏教史的位置」(前掲)、『朝鮮義僧将・松雲大師と徳川家康』にも述べられている。
- (19) 天海は「抑耳和尚之為人也。研_三究諸經論、全非_三他教墨之儔、何敢守_レ株乎、天質自然具_三足禪機_一」(『慈眼大師全集』、二九三頁)といい、円耳が禪宗と教学のどちらにも秀でた人物と記している。
- (20) 『興聖寺開山四百回忌記念』、九頁、一一頁、一三頁。
- (21) 『大日本仏教全書』一〇四、一八一頁下。
- (22) 李元植、前掲、二五〇—二五一頁。
- (23) 「日本国権大僧都恩円耳禪師」の「恩」は不要か。「尊号」は「道号」か。「無染」の前に「以」が必要か。「凝古作近体」の「凝」は「擬」か。(以上、李元植、前掲、二五〇頁参照)
- (24) 『四溟堂大師集』の初版行本は現在所在不明。東国大学出版『四溟堂大師集』(二〇一四)は、一六五二年に性一が重版したものである。以上、国際仏教学大学院大学博士課程在学、曹勢仁氏にご教示頂いた。心より感謝申し上げます。
- (25) 『興聖寺開山四百回忌記念』、一一頁。

- (26) 『大日本仏教全書』一〇四、一八一頁下。
- (27) 「五山三倭僧來見 因問禪宗綱領以無頭話贈」に関して、円耳撰『諮詢仏法録』の存在をこ存じなかった上村観光氏は「五山の僧は、彼らの力量を觀むために一語を求めたのであらうが、却て彼らに一揆を下されたるの觀がある」と述べる。(『五山文学全集』別卷、一二八一頁)
- (28) 『韓国佛教全書』八、七二頁上—中。
- (29) 李植元氏は「若干の異同」(「住↓在」、「似↓以」)について指摘なし)について「この墨跡に書かれた字句が、後日刊行された『四溟堂集』には、修正が加えられたに違いない」と述べている。(李植元、前掲、二五一頁)
- (30) 円耳に関わる詩文六首の訓読及び解釈については、禅僧でもある木村清孝先生からご指導を賜った。ここに深く感謝申し上げる。
- (31) 「門開三觀莫遲留。得路行行到始休。鑑像照心無所住。樓鐘出礙有來由。頂中具眼如天主。时後分符似國侯。應世度生游幻海。月船風棹駕濤頭」(威徳自在菩薩章)、『宏智禪師広録』、『大正蔵』四八、八四中)
- (32) 『韓国佛教全書』八、七一頁中。
- (33) 同上。
- (34) 何宇鳳、前掲、三一九頁。
- (35) 同上。
- (36) 「類して等しからず」(「白馬入蘆花、銀碗裏盛雪」)、『碧巖録』、『大正蔵』四八、一五三中)
- (37) 李植元氏は「贈日本円耳教師三」のみが松雲大師から円耳に贈ったものとし、「五山三倭僧來見 因問禪宗綱領以無頭話贈」については言及がない。(李元植、前掲、二四六頁—二五一頁)
- (38) 南山鼈鼻蛇〓南山にいる鼻のひしゃげた毒蛇(『碧巖録』卷一第五則、卷三第二十一則)
- (39) 『韓国佛教全書』八、七一頁中。
- (40) 鉗鎚〓禅匠が修行者をきたえる手段。(『禅語辞典』)

- (41) 野狐精〓「やこぜい」。野狐の物の怪、またはそれに取り憑かれた者。(『禅語辞典』)
- (42) 『韓国佛教全書』八、七一頁下。
- (43) 『韓国佛教全書』八、七一頁下。
- (44) 『四溟堂大師集』卷七、「次承兌韻」(『韓国佛教全書』八、七一頁上)
- (45) 何宇鳳、前掲、三一九頁。
- (46) 『興聖寺開山四百回忌記念』、一三頁。

参考文献

- 『興聖寺開山四百回忌記念』(興聖寺、二〇一六)
- 『統日本高僧伝』「円耳伝」(『大日本仏教全書』一〇四)
- 『慈眼大師全集』上(統群書類従完成会、一九九一)
- 『鹿苑日録』四十四(統群書類従完成会、一九六二)
- 『五山文学全集』別卷(思文閣、一九七三)
- 『四溟堂大師集』七(『韓国佛教全書』八、東国大学、二〇一四)
- 李元植「講和使僧松雲大師と日朝善隣外交」(仲尾宏・曹永祿編『朝鮮義僧將・松雲大師と徳川家康』、明石書房、二〇〇二)
- 何宇鳳「国交再開期における松雲大師の活動とその意義」(同上)
- 康東均「溟堂惟政の思想的位相に関する考察」(『印度学仏教学研究』五〇—二、二〇〇八)

【翻刻文】

〔凡例〕

- ・漢字表記に關し正字に統一する。
- ・割註には（ ）を付す。
- ・原文には無いが、読みやすいように文や語句の区切りに適宜「○」を付す。

- 001 諮詢佛法錄
- 002 日本國城州興聖精舍沙門圓耳了然。稽首和南。
- 003 獻上疑問一十條。請判是非。
- 004 第一。見性悟道。請判是非。
- 005 問。如何是佛。即心即佛。無念是道但無生。心
- 006 是非能處。無動念百思想。心無一法可得。無
- 007 一行可修。心本是佛。佛本是心也。圓覺經曰。
- 008 一切衆生本有圓成佛矣。若百物不思令念
- 009 絕者。名為自縛。謂眼見色境。心不染著。
- 010 名為無念。耳聞聲境。心不染著。名為無
- 011 念。乃至意取法境。心不染著。名為無念。但淨本心。便六識從六根走
- 出。於六塵
- 012 中無染無着來去自由。即是自在解
- 013 脫。名無念行。壇經曰。若百物不思當
- 014 令念絕。即是法縛。即名邊見云云。稽
- 015 首請判是非。
- 016 第二。教外別傳。請判是非
- 017 問。如何教外別傳。是有二義。一者。達磨
- 018 大師受法。天竺躬至東土。見於學人多
- 019 未得法。唯以名數為解。以事相為行。
- 020 欲令知月不在指法是我心故。但以心傳
- 021 心不立文字。顯宗破執故有斯言。非離
- 022 文字說解脫也。故教授得意之者。即頻讚
- 023 金剛楞伽云。此二經是我心要。(宗密禪師禪源集義也。宗鏡錄
- 024 祖庭事苑義同之)。二者。文殊般若云。物持(本分)無文字。
- 025 (教指)文字顯惣持矣。然惣持無文字。則
- 026 達磨契之。而離文字直指也。文字顯惣
- 027 持。則諸宗即之。而以文字引道也。(中峯和尚
- 028 廣錄義也。日本上古禪師皆用此義也)。稽首請判是非。
- 029 第三。既云不用文字而用言句。請判是非。
- 030 問。言不依文字直指之禪者。達磨三
- 031 論。三祖信心銘。六祖壇經。并禪師
- 032 諸錄滿於天下。何云教外別傳耶。
- 033 今言。禪師言句繁多。唯佛法示不有
- 034 言句上。都非如教釋假言句詮弁也。問。
- 035 若尔者。諸錄中引諸大乘經述祖意何耶。
- 036 答。若是眞實有處契證之人。豈惟大乘
- 037 經論之語。能契達磨之禪。但是麤言軟
- 038 語。至如風起雨滴。未有不與達磨禪相契

- 039 者。稽首請判是非。
- 040 第四。禪門本分生佛未分位。請判是非。
- 041 達磨處傳直指之禪。不假言句。其儘直示。
- 042 故不涉法門義理。不涉情識。分別。無為。計較。安排。放下一切義理。就不及心識。勉令參決。
- 043 故云。生佛未分位。不同教門明生滅真如二門。
- 044 破妄法成始覺。自始覺入本覺。自本覺入真如而已。稽首請判是非。
- 045 第五。禪門不立修行用心。請判是非。
- 046 禪門本分在凡不滅在聖不增。人々具足箇箇圓成。是故善知識見機緣直下契當。故
- 047 或示即心即佛。或示庭前柏樹子。或行棒或下喝。皆是本分直示也。學者受之直下大悟也。不同教家立解行證。修行用心也。問。
- 048 縱令直下大悟凡執難斷。不用修行如何
- 049 契當本分。答。不假修行直本分契當人。
- 050 不及論之。若聞本分法門。雖有信解無想。應分人無方便中立方便。無修證中立修證。請判是非。
- 051 第六。法界平等無解無證中。假立解悟證悟。請判是非。
- 052 聞本分法門。學者信解云解悟矣。本分契當云證悟也。解了本分為易。證本分為難許。老
- 062 胡知不許。老胡會是也。當世禪師多信解分際。謂證悟句到分際。謂意到本分相應斷絕。顛倒妄想熾然。今一何不愍哉。一何不愍哉。
- 063 佛法正傳 大師垂大慈悲。令法燈傳授為法。施利可謂博大殊勝焉。並問。禪源集中建立漸修頓悟。頓修漸悟。漸修漸悟。頓修頓悟。四句接於一切於臨濟宗。無修證中修證許。此義如何。
- 064 又日本古德中。以慧能禪師接頓悟漸修中。謂於五祖下解本來無一物者。頓悟也。厥後剃髮受戒學佛法者漸修也。此義可不。又問。以能師屬頓悟漸修者。本分解了分際。云得法歎不審。
- 065 又問。以能師屬頓悟漸修者。以誰人可云頓悟頓修耶。稽首請判是非。
- 066 第七。宗密禪師教立三宗。禪立三宗。配對相符。於臨濟宗許此義不。請判是非。
- 067 宗密禪師禪教各立三宗。禪三宗者謂。一息妄修心宗（北秀等門下）。二泯絕無寄宗（牛頭等門下）。三直顯心性宗（荷澤等門下）。教三宗者。一密意依性說相教（此一教中自有三類。一人天因果教。二斷
- 068 或滅苦教。三將識破境教）。二密意破相顯性教。三顯示真心即性。
- 069 教經論廣博統唯三宗。禪門種多統唯三宗。
- 070 配對相符方成圓見云々。今問。臨濟宗許此義耶。
- 071 謂言教以文字顯本分。與禪門不立文字直示本

- 084 分。雖有不同。處顯之理。不出此三義故。又不尔耶。
- 085 稽首請判是非。
- 086 第八。法眼荷澤。以心為名以知為躰。臨濟宗許
- 087 此義否。請判是非。
- 088 宗鏡錄曰。以心為宗。禪門正脉且心是名以知為
- 089 躰。此是靈知性自神解。不同妄識依緣託境作
- 090 意。而知又不同大虛空廓斷。滅無知云々。又禪源
- 091 集曰。知之一字衆妙之門。言知者不是證知。意說
- 092 眞性不同虛空木石。故云知也。非如緣境分別
- 093 之識。非如照躰了達之智。直是眞如之性自
- 094 然常知。又曰。默傳心即者唯默知字。至荷澤時
- 095 恐宗旨滅絕。遂言知之一字衆妙之門云々。今問。
- 096 臨濟宗用於本心。不以言句談知之義。默傳心印
- 097 歟。亦許此義歟。稽首請判是非。
- 098 第九。本分契當。唯共作一佛不。請判是非。
- 099 伺經論意眞如一理。衆生妄執薰習故。各々着
- 100 別。又諸佛慈悲薰習故。各々着別云々。(煩重故不引之)。又
- 101 禪門宗鏡錄意同之。謂問。只共作一佛。不能各
- 102 各自成。答。不共作一佛。不各々自成。此義難了。試
- 103 拳喻看。如國清寺法界也。住寺僧古佛也。遠人暫
- 104 遊暫感佛也。他日愛慕剃髮配寺。國清即我寺也。
- 105 五峰松徑臺殿房廊悉我有也。頓得受用不滅佗
- 106 物成我家也。不人々別造寺也。不共佗分一寺也。分
- 107 即隨人去。常住法界不可分也。乃至本師積功。薰
- 108 修慈善根力。令一切衆生自心處見云々。禪教意
- 109 共同焉。於臨濟宗如何弁之耶。稽首請判是
- 110 非。
- 111 第十。予坐禪中。慧能禪師光來印可悟道。請
- 112 判是非。
- 113 予慶長四年(巳亥)曆九月朔日二更。坐禪中老
- 114 和尚將伴僧二人來。伴僧告我曰。此老和尚曹溪
- 115 慧能大禪師。汝一心皈依大師。今汝悟道為印
- 116 可。未臨此處干時。老和尚問予曰。依馬鳴菩薩。
- 117 心躰離念相語。為悟道者。汝禪師耶。予答曰。
- 118 本來無念相。云何離念相。本來圓成佛。云何
- 119 得悟道。老和尚即印可曰。可離無念相。是眞離念相。可證無
- 120 悟道。是眞得悟道。汝傳法相續。勿斷絕佛種。言
- 121 畢不見矣。我猶夢悟。密閱檀經。善知識後代得
- 122 吾法者。常見吾法身不離汝左右云々。是言實
- 123 有處謂哉。今問。應有此道難否。以 大師開示
- 124 倍可信此義。予閱起信論。且有處以。某歲十九
- 125 而自出家。列釋氏。勤勉台教十年日。夜不懈
- 126 得誦三大章疏六十卷。并三十餘部俱舍等。
- 127 尔後他學徒日夜講臺教十有二年。積功累
- 128 德不脫教綱。都無佛法解。依之檢諸章疏。或
- 129 時起信論當離念相之句。得信解分際。又集

- 130 禪錄五十餘部。誦之。驗得起信論解。當此時密
- 131 作坐禪工夫。砌轉見此靈瑞。古人法重者。永嘉
- 132 因閱維摩悟佛心宗。而見六祖嗣法。黃蘗悟
- 133 馬祖意。見百丈嗣法。予今幸不渡萬里。坐值
- 134 徑山。大善知識。不宿世因緣何預此事。垂大
- 135 慈悲令大法傳授。其德何可思量。稽首
- 136 請判是非。
- 137 予積年惟。何幸此身值遇大法。心薰佛法。
- 138 猶根緣淺。無正傳師。諮詢無地。如犢思乳。
- 139 快哉。不意逢善知識。如一眼龜值浮木孔。
- 140 上士慈悲傳授大法。法施功德不可思量。
- 141 如來說曰。財施有盡。法施無盡。致菩提故。
- 142 諮詢佛法錄。
- 143 日本慶長第十龍集(乙巳)曆二月朔日。沙門圓耳了然。稽首和南。